

|                     |                                                                                                                                                                                                                   |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 韓国における「福沢諭吉」：<br>一九九〇年代における福沢諭吉の研究状況を中心に                                                                                                                                                                          |
| Sub Title           | Yukichi Fukuzawa in Korea : the trend of Y. Fukuzawa in the<br>investigation in the 1990s                                                                                                                         |
| Author              | 林, 宗元(Lim, Jong-won)                                                                                                                                                                                              |
| Publisher           | 慶應義塾福沢研究センター                                                                                                                                                                                                      |
| Publication<br>year | 2008                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle              | 近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese<br>studies). Vol.25, (2008. ) ,p.259- 282                                                                                                                                     |
| JaLC DOI            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes               | 福沢研究センター講演録                                                                                                                                                                                                       |
| Genre               | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL                 | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20080000-0259">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20080000-0259</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 韓国における「福沢諭吉」

——一九九〇年代における福沢諭吉の研究状況を中心に——

林 宗 元

ただ今ご紹介に預かりました林宗元です。普通、英文で書くときにはリム・ジョンウォン (Jong-won, Lim) と申します。

皆様はちょっとおかしく思われるでしょうが、韓国の国内で発表された福沢関連の論文を集めましたら、一九九〇年代のものばかりで、今年（二〇〇四年）の五月までで全部で九編ありました。その中から自分なりに六編を選びまして皆様に紹介するつもりでおります。<sup>(1)</sup>国内における福沢諭吉に関する研究の状況は、日本の専門家たちが見ましたら、まだまだ初歩の水準であろうと思います。これらの論文の内容における特徴的なところ、専門家たちの見解をたどってみるにより、研究者たちの観点、志向するところが大体おわかりになるだろうと思います。あまり知られていないと思われる今日の韓国の研究者たちの、その反応のほどが窺われるだろうと思います。

まず、はじめに「兪吉濬と福沢諭吉の政治論比較研究」という論文です。<sup>(2)</sup>これは、善文大学という新しい大学で日本学をやっている李起勇（イー・キヨン）のもので、序論の部分の、近代における朝鮮の対外思想、日本の対外思想をめぐって、両国の背景の違いに関して書かれている箇所を紹介します。

朝鮮王朝では建国以来朱子学の一元的な思想体系が中心をなしてきました。対外的には華夷思想、「華」と「夷」を区別する名分論的な世界観というものがありません。朱子学は正学と異端の区分を明確にして、異なる思想とか学問などは認めなかった。儒学においても異なる流派というものは、認めていなかった。けれども、日本の場合は幕府時代に儒学が正統思想でありながら、儒学は古学、朱子学、陽明学など、さまざまに展開され、また儒学者たちが神道とか仏教とか蘭学などを学ぶことができました。この点は、日本と朝鮮とは甚だ異なっています。このように朝鮮の場合には思想的な特性がほとんど全体的であったのに対して、日本の場合は多様で包括的で、思想の受容という点においては格段な違いがあったと思います。また対外的には日本という国は、朝鮮とは違って、中国を意識する華夷観的な世界観というものがなく、むしろ日本を中心に思う日本式の華夷観というものがあった。早くから鎖国はしていたものの、朝鮮には無かった長崎という国際的な窓口を持っていた。つまり、日本はある程度、開国に対する準備態勢が整えられていたが、朝鮮の場合は全く無防備のものであったと言うことができます。朝鮮は儒教の統治の下で支配階級の階層が文臣であったのに対して、日本の場合は武士階級であった。日本民族は体質的な面から申しますと、一方では崇文的、且つ平和的であり

ながら、もう一方では崇武的、且つ好戦的な特性を持っていたと言っています。

こうなりますと、韓日、日韓両国は同じ近代の儒教文化圏の歴史過程をたどってきましたが、同じ儒教といっても、西洋に対する免疫性、イミューニティの違いから来る思想的または体質的な特性の違いがあり、朝鮮の兪吉濬というような近代思想家の前には、日本の福沢論吉とは比較にならないほどの解決しなければならない重い課題と前提条件が置かれていたと言えます。論文の中で論者は、兪吉濬の民権論と天賦人權論に対する見解あるいは知識等は、福沢論吉の『西洋事情』から影響されたところが多いと言っています。そして、自由と通義を、無形有形などをもつて表現する方法に至るまで、福沢の論法にそのまま従っていることを例に挙げて、丸写しにしたものにすぎないという指摘をしています。

兪吉濬の場合も、万国公法に関して述べています。彼は、国家の独立を保つためには万国公法の体制の中に入っていった対外的に自主権を認めなければならないと主張しました。しかし伝統的に朝貢関係にあった中国との問題が阻害要因として常に存在していたと論者は指摘しています。

兪吉濬はあまりにも干渉を強化してくる中国との関係を両裁体制だと批判しました。また、国際法的な通念がない朝貢国と、従属国との差別化を試み対外知識を確保しようとした。しかし、日本の場合は初めからそういった対外的な阻害要因というものはなかった。むしろ日本は不平等条約の改善とか、西洋勢力からの独立国家建設とかいう急な課題を解決しようとしていた。つまり兪吉濬と福沢とは文明開化のために西洋を目標にするという視点は合致していたが、立場の違いにより、その志向するところが違ったと言えることができるでしょう。

次には、征韓論について論じています。征韓論の場合、兪と福沢と、二人とも西洋の立憲君主制をモデルに

している。特にイギリスの均衡のとれた政治を理想と考えているという共通点があります。

兪吉濬は、先代の王政制度が基本の枠で、君主の世襲とか、君臨の国ということですが、これを維持しながらブラス西洋立憲君主制が加われば、これこそこの上もない理想的な到達点であろうと考えていた。

以上のことを整理すると、兪吉濬と福沢の一君万民体制の構想は、その形態だけを見ると、類似しています。しかし、兪吉濬の場合、彼の根本価値観である五倫思想、五倫の塔と言っていますけれど、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信の道德のことですが、この道德の内に君主も属します。一方、福沢論吉の場合は、天皇とは、道德性までも超越する全体的な存在価値として信仰する存在であります。これは、福沢論吉の志向するところが強力なる国権を持つ国体の確立というものであったためであろうと論者は結論づけています。

以上、両者の政治論の違いをテーマにする李起勇の論文に關して触れました。

## 一一

二番目は、韓国政治学会の九七年度年例学術大会で発表された慶熙大学の韓教宣（ハン・ギョソン）の「福沢論吉の政治思想…その自由概念を中心にして」<sup>(3)</sup>という論文です。

まず論者は、福沢には日本の自由主義の親、且つ日本帝国主義の先導者という相反する評価があるため、その思想の解釈は頻繁に論難を惹起するということを前提に、第二次大戦後、日本では福沢の思想に対する関心が高まり、その研究が盛んになったという点を指摘します。それは戦後アメリカが占領していた時代に、改め

て自由民主主義を学ぶことになった日本人にとって、敗戦が日本近代化の大失敗を意味するものであり、戦後の焼け跡で消えていきそうになる日本の自由主義の火を生き返らせようとする努力のあらわれであったと述べています。

これとは反対に、富国強兵策に即した超国家主義、ないしは日本帝国主義の思想の先導者としての福沢、という事実を究明するために福沢諭吉に関する研究が行われたという点も書いています。

見逃せないことは、彼に対する評価が肯定的であれ、否定的であれ、韓国において、あるいは中国において、日本の近代、または近代性ということを話す場合、福沢諭吉を抜きにしては話ができないという点です。したがって、韓国の近代、且つ近代性というものに対して話をしようとする者にとって福沢諭吉という人物は必ず経由をしなければならない通過点であり、且つ出発点であると、論者は断乎として言っています。その上で、論者は、福沢に批判的な研究者の論も取り上げています。

ひとつは、福沢が一八八〇年までは自由主義者であったが、そのあと民族主義者になった、すなわち国際関係に対して楽観的であった彼が、国際関係に残酷な現実を自覚してから、その立場を自由主義から民族主義に変えるしかなかったという見解です。これはアルバート・クレイグの説です。

クレイグ説によりますと、一八七五年に自由主義の思想の立場に変化が起り始める。これは『文明論之概略』、それから『学問のすゝめ』十四編が発表されたときなのですけど。それから一八七八年、これは『通俗民権論』を意味します。このときに、自由主義を完全に捨てナショナリズムを選ぶようになったと言っています。またクレイグは、この時期に福沢が自然権と自然法に対する関心を表明している事実に関して、福沢は国際関係をだんだん現実的に認識するようになりながら、自然権に対する倫理的な見方を修正するようになった

と解釈しています。言い換えれば、福沢が自由思想を放棄するようになった、ということです。しかし論者はこういう説には反対な立場です。

こうした見解とは違って、カーメン・ブラッカーは、自然権と自然法に対する福沢の信念が、一八八〇年代には変わらなかったと主張しています。特に自由主義者たちの間で西洋化に対する初期の理想がやや冷めてきて、政治的保守主義と文化的民族主義が起り始め、多数の自由主義者たちが、この潮流に巻き込まれていた一八八〇年代にも、福沢の自由主義思想は一番充実にあり、当時、唯一の自由主義者が福沢論吉であったとブラッカーは主張している、と論者は言っています。

論者はまたクレイグの二分法を批判して、単純化しすぎていると指摘しています。論者は、福沢は初期において『文明論之概略』が発表されたとき、福沢が四十代の初め頃ですが、民族主義の要素のない自由主義の思想家であり、その後自由主義の要素の無い民族主義者に変ったという仮定もまた間違っていると言い切っています。福沢論吉の著作、特にその中でも『学問のすゝめ』を綿密に読めば、彼は確かに自由主義者ばかりではなく、民族主義者として出発したという事実を発見できる、と言っています。福沢は彼の思想の初期から、国際関係を念頭に置きながら民族主義と自由主義的な見解を一緒に持っていた、と論者は言っています。福沢の政治思想の目標は、生涯をかけて自由主義プラス民族主義、つまり、自由主義と民族主義との結合への追求であったと書いています。

ここで論者は、自由主義的な民族主義、リベラル・ナショナリズムといった丸山真男の政治理論を引用して、福沢の思想の中で、変化とは自由主義から民族主義への単なる変化ではなくて、自由主義的民族主義から保守主義的民族主義への微妙なる変化であったと言っています。

論者の言葉を読み上げます。

実に福沢の著作を検討してみますと——もちろん福沢の著作は膨大ですけど、まず注目しなければならぬのは、

その一、福沢は自由の概念を正しく認識させようと相当の努力を傾けている点。

その二、自由の重要性を強調している点だ

また論者は次のように言っています。福沢には二つの自由がある。つまり、個人の自由と国家の自由。しかしながら福沢は、個人の自由が国家の自由のための手段であることを暗示し、且つ国家の自由が最優先であると言っていました。『学問のすゝめ』に、「理のためにはアフリカの黒奴にも恐れ入り、道のためにはイギリス、アメリカの軍艦をも恐れず」という言葉が出ています。これは、内容そのものは言うまでもなく、文章もまた名文だと思います。私は個人的に、こういう福沢諭吉の文章に強力な魅力を感じてきました。そして、福沢諭吉という人物に対してだんだん関心を持つようになってきました。福沢諭吉がいて日本は幸せな国だったと思うたこともあります。

論者は『文明論之概略』が、民族主義と愛国主義とを選択しなさいというメッセージだと言っています。また『学問のすゝめ』が個人の独立を確保する手段として学問の重要性を強調するために発表したものと見ています。論者は、こういう著作の目標が、変化を起こさせる手段としての教育の重要性を信仰している儒教の教育論をそのまま踏襲したものと主張しています。その国の自然権としての自由、平等な自由を保障しようとす

る政府の役割に対して、ここで論者は、福沢は全ての政府が最小限社会契約に基盤を置いていると考えている、と言っています。市民権としての自由などに対しても言及しています。

結論においては、福沢の自由の概念は狭い抽象的な、機械的な概念ではない。たとえ彼の自由観が古典的な、且つ政党の自由主義の思想に依存はしていても、個人の道徳的な発展と市民権とを意味する幅広い豊かな完全なる概念である、として、福沢の自由思想を高く評価しています。福沢における自由というものは、自由放任主義ではなくて道徳的自立、個人の自己発展そして市民の徳（モラル）と定義しました。

この論文は家永三郎と丸山真男、鹿野政直の論文を引用しています。

## 三

三番目は「福沢諭吉と朝鮮開化派」という論文です。これは金旼奎（キム・ミンギユ）<sup>(4)</sup>の論文です。この論文は、福沢諭吉の対朝鮮観、そして朝鮮の開化派に対する援助という二つのテーマに分けられています。

まず論者は、福沢が朝鮮の開化派に出会ってから、それまであまり深刻に思っていなかった朝鮮に対する関心が、大きく変質して、武力を使っても積極的に朝鮮に干渉すべきだという方に旋回するようになったと述べています。そして、ここで、我々が注目しなければならないことは、今までの無視ないしは無関心の態度から、なぜ突然武力をもってでも介入して干渉することを主張するようになったのかという問題です。そこには次のような別の動機があったと論者は指摘しています。

一番目、朝鮮の一八七六年の開港。これは日朝修好条規です。初めて朝鮮が強制によって開港したときです。中国に対する強力な牽制、朝鮮の反発、そして消極的であった明治政府の朝鮮政策が積極的なものになるようになった点などは重要な動機の一つです。

二番目、西洋列強に対して疑いの念を懐くようになったという点。

三番目、朝鮮の開化派との出会いによる新鮮な衝撃。

福沢諭吉は朝鮮の開化派の人物に出会ってから、今までの無関心、または蔑視的であった対朝鮮観を修正して、より積極的に対処し始めました。このように積極的な態度で朝鮮政略へ方向を変えるようになるのは西洋諸国に対する危機意識が働いていたためである。そして脱亜論の発表の時点に関しては甲申政変の失敗——日本では事変と言っていますが、そして、彼自身が主張していた対清、対中国との開戦論が清国との和解により水の泡になるや、脱亜論の社説を発表するようになったと言っています。

また論者は、福沢が今まで朝鮮に対して干渉してきた事実を正当化し、これからは、西欧諸国と共に隣の国である朝鮮を侵略すると宣言したのが、つまり脱亜論の根本の趣旨であると言っています。日本人の三輪公忠の論文を引用して、少なくとも外交問題においてはまことに当然なことであり、福沢が持っていた日本の未来に対するビジョンは、人間の歴史のどのようにすることもできない推移により、意識的且つ計算により形成されたと言っています。これは、福沢諭吉の意識の内面の中に、綿々と流れている侵略性、つまり侵略を当然視する性向、あるいは侵略主義を意味しています。この侵略性は、後日自分の国の国民たちをはじめ、数多くのアジアンの命を奪い取ることとなる歴史をつくらせた、と述べています。

次に、朝鮮の開化派への援助に対して簡略に触れることにいたします。

福沢には朝鮮の政治、経済、文化などの諸方面にわたって開化派を援助した記録が残っています。論者は、朝鮮を改革するために必要な政治資金を直接支援することはできなかったが、『時事新報』を通して朝鮮の借款を強力に進めた一方、朝鮮の開化派たちには政財界の有力な人物を紹介してくれるなど、あらゆる力添えをしていたと述べています。しかしこうした経済的な支援もまた侵略的な発想から生まれたものと結論づけています。

朝鮮語の新聞の発行、朝鮮からの留学生の受容などもまた朝鮮内に日本党の勢力を扶植するためであって、慶應義塾の経営の上、多少とも新しい活路を見いだすためであったということを指摘しています。且つ政治的な支援。論者は甲申政変を例に挙げていますが、その目的が朝鮮に親日政府を立てるためであったと言っています。

以上、金岐奎の「福沢論吉と朝鮮開化派」という論文の内容に対して触れてみました。

## 四

四番目の論文です。<sup>(5)</sup> 明治九年、先程申し上げた日朝修好条規の締結したときに、当時鎖国状態にあった朝鮮国は武力、つまり日本の軍事力によって開港された、これは近代社会における最初の政治外交、軍事的な一大事件であったと言うことができます。当時の朝鮮人が、このような新しい国際的な状況をどう認識していたかという問いに対して、論者である崔は、我々の立場、朝鮮の立場と共に、進出してきた勢力、つまり日本側の立場が共に議論されなければならないと言います。開港以後朝鮮に進出してきた諸勢力が、朝鮮社会をどう認

識していたかということの研究の出発点として福沢諭吉を選ぶようになったと、関心の動機を述べています。

結果論的な解釈になるかもしれませんが、朝鮮を圧迫していた勢力のうちで、開化期の全時期にわたって、日本が、一番大きな変化の要因として働いていたのは否認できないことです。福沢諭吉は明治日本の最大の思想家であり、彼の創刊した『時事新報』の社説を通じて、当時の日本人の、朝鮮人に対する認識と世論の形成に大きな影響を与えました。尚且つ朝鮮の開化論者たちとも、早くから幅広く交流を持ってきた人物です。そのため、福沢諭吉を研究の対象にしたと、論者は繰り返しています。

また次のようにも述べています。福沢に関する韓国内の研究は概して直接的なものというよりは、彼と親密な関係を持っていた開化派の人たちに対する研究に付随して行われる傾向がある。特に開化派のうちでも兪吉濬に関する研究が活発に行われ、兪吉濬の思想形成に多大なる影響を及ぼした外部要因としての福沢諭吉、という評価がなされてきたと言っています。その結果、福沢の影響に対しては、甚だ異なる結論が引き出されることがあります。たとえば、以下の二人の論がそうです。

韓国の李光麟（イ・クアンリン）、この人は西江大学を退職した人なのですが、『韓国開化思想史』という著書があります。この本には、兪吉濬の開化思想と徐載弼（ソ・ジェピル）の開化思想、また彼の独立新聞、開化派の改新教観等々七編の論文が掲載されています。

それから、もう一人金泰俊（キム・テジュン）。東国大学の教授です。この人は、福沢諭吉に関して、李と相反する主張をしています。兪吉濬の『西遊見聞』という著書は福沢の『西洋事情』が及ぼした影響の代表的な例だということができますが、二人は各々『西遊見聞』の目次と『西洋事情』の目次を比較検討して、次のように結論づけています。

まず、李光麟は、兪吉濬における思想の独自性というものを認めました。一方金泰俊は、この本、つまり『西遊見聞』は福沢の『西洋事情』を七〇%以上踏襲したもので、将来『西遊見聞』の原型を解明する作業は比較文学の研究の重要な一点となるはず、と言っており、『西遊見聞』において二人は相反する主張をしています。私も実質的には兪吉濬が書いた『西遊見聞』という本は福沢諭吉の『西洋事情』、その内容の相当の部分を模作したものと判断しております。

また、論者は、日本の青木功一、坂野潤治、遠山茂樹の研究成果に対しても言及しています。まず青木の場合ですけど、この人は特に開化派の朴泳孝（パク・ヨンヒョ）という人を通して、福沢と朝鮮の開化派の關係、そして『時事新報』を通しての朝鮮觀の分析にいたるまで、研究の幅を広めてきたと紹介し、坂野の場合は、『明治日本の対外論の研究』という大きなテーマから出発して、時期的には特に一八八二年の壬午軍乱、甲申政変はその二年後のことですが、この前後においての日本のアジア觀、且つアジア政策論の変遷過程の典型という観点から、福沢の朝鮮認識を集中的に検討したと紹介しています。また、遠山茂樹の著書を引用して、壬午軍乱の前後の時期における福沢諭吉の朝鮮觀ということに対して触れています。

これらのうちで李光麟、金泰俊、青木、この三氏が、福沢が朝鮮の開化運動及び開化思想の形成に及ぼした影響に対して研究の焦点を絞っています。坂野の場合は、福沢の認識、より具体的に申しますと、明治中期における日本人の対外認識の典型という観点から議論を展開しています。

一方、研究対象時期の問題ですが、これに対して論者は、日本の学者が研究の対象時期を壬午軍乱と甲申政變の時期、つまり一八八二年から八五年の前後に限定している理由について次のように分析しています。

第一、明治日本の対外思想史のうちで脱亜論に大きな比重を置いたためである。多分、脱亜論が単純なる対外認識の変化ばかりではなく、自由民権運動の衰退を示してくれる象徴性のためではないだろうか。

第二、福沢と緊密な関係を持っていた金玉均などの急進開化派により甲申政変が指導されたという事実  
に注目しているためであろう。

論者は、この論文の中で、研究対象の時期をおよそ壬午軍乱の前後の時期、甲申政変前後の時期、甲午政変前後の時期の三時期に分けて論じています。脱亜論は、『時事新報』創刊以来福沢が主張し続けてきた、日本、中国、韓国の輔車唇齒の関係の全面的で永久的な放棄宣言であるという結論も、先達の研究者たちによって報告されているのですが、実は、脱亜論に現れた福沢諭吉の对中国政策は以前のもものと大きな違いは見られません。三国のうちで中国の場合は壬午軍乱のときから輔車関係というよりは、朝鮮問題に関連して、実質的に敵対国家と見なされてきていた。

一方、中国とは違って朝鮮の場合、脱亜論の内容は全く新しいものであった。福沢は朝鮮の自主独立、文明への努力などを支援するのが日本のいわば役割、分限であると言ってきました。そして清仏戦争（一八八四年）のときにも、朝鮮に対する関心の焦点は、相変わらず中国側が言っている朝鮮属国論を批判し、朝鮮の自主独立にありました。こうした福沢の立場が脱亜論にいたっては朝鮮の独立と文明開化への希望の放棄に急旋回します。

こういうところから見ると、過去の研究者たちが指摘したように、脱亜論は朝鮮に対する重大な変化を示してくれるものには違いないと思いますけれど、脱亜論だけをもって、福沢の朝鮮に対する態度が根本的に変

わつたと断じるにはまだ早い、というのが論者の言いたいところです。

というのは脱亜論以後にも、『時事新報』創刊以来から堅持してきた姿勢、つまり朝鮮の開化論者の活動に共感を示すとか、あるいはこういう人のために支援したといった姿勢にはあまり変わりがなかったと考えているからです。日本は朝鮮を開国させた国家であるから、当然朝鮮の開化問題に対しては義務と責任を持つべきだという認識が、多分福沢にはあったわけです。論者は、福沢が政治的危機、または対外進出の可能性、及び必要性があると判断する場合には、いつでも政府の政策決定に先んじて、朝鮮進出を積極的に要求したと言っています。

参考文献として初瀬龍平と坂野潤治の本を引用しています。

## 五

五番目は「福沢諭吉と李光洙（イ・クァンス）の反儒教論の政治思想的意味」という論文です。<sup>(6)</sup> 李光洙は夏目漱石と同じ時代に生まれ、韓国の近代文学に貢献した人です。日本に渡って勉強したり、著述をしたりしています。

この論文の目的は、二人の代表的な反儒教論者である福沢諭吉と李光洙の著作を検討することによって、東アジアの政治思想における反儒教思想の性格と意味を、批判的に分析することにあると言っています。

また、福沢諭吉と李光洙の著作は、韓日、日韓両国の反儒教思想の本質を代表する。したがってこの二人を反儒教論者を選んだと、その動機を言っています。さらに反儒教主義の概念を、十九世紀末以来の西欧の制度

と思想を受容しながら、近代化の道を歩んだ東アジア国家において発見される反伝統主義の主要なる傾向をあらわすと定義しています。元来儒教に対する再評価は、西欧思想によってなされてきた。論者は、西欧思想を受け入れる儒教批判論者たちも、自分たちが学んできた儒教的世界観の影響から、完全に離れることはできなかったと考えています。反儒教思想の意味は二つの確かなパースペクティブがあると言って、次のように整理しています。

一つは、西欧の政治思想に立脚した儒教的な政治思想の再解釈、もう一つは、儒教的な政治思想の観点からの、西欧の政治思想の再解釈です。この二つのパースペクティブを同時に持つと、私たちは、反儒教主義が儒教と西欧思想の修正を共にリードしていくことを発見する。言い換えるなら、反儒教思想とは二つの高度に発達した対照的な政治思想の修正された形態の独特の総合であると言っています。

福沢と李光洙の反儒教主義の性格を議論するために、両人の類似した点と、その差異点、相違点に重点を置いて、この両作家の著作の特徴を次のように比較しています。

まず類似性から始めますと、確かに福沢と李光洙は、一人とも儒教を解体しようとする急進的な思想家であったということです。この二人の間には、七つの共通した要素があると論じられています。その七つは、次のようです。

一番目、真理とは時間と空間の変化の如何により変わるしかないという歴史主義に即した両者の相対主義的思考は、一種の自然法に根拠をもつ儒教の絶対的な権威と対比される。歴史主義の論理に即しますと、儒教というのはもう過去の理念、つまり封建時代の理念です。したがって儒教は現代社会とは両立できない。

二番目、両者は、儒教が家族制度を基盤にするという信念を持っており、儒教に対して体系的に攻撃をした。

儒教権力の堡壘を取り崩すために、家族の倫理と制度の基盤を破壊するのがまず先決条件であった。

三番目、二人とも「孝」というものを儒教的専制主義の中心的概念であるとみている。二人は、「孝」が一方的に義務だけを強要するものと理解している。したがって「孝」の支配する社会には、独立した個人というものは存在し得ないと主張します。子供に対する親の義務を強調することによって、「孝」を双務的な義務に変えようと努めた。親が施せる恩恵とは、つまり義務です。子供のために教育を受けさせるようにすることである。福沢は一方的な親子関係に立脚した家族の関係を、夫婦中心の關係に改革しようとした反面、李光洙は家族を子供中心の關係に変えようと努める。

四番目、女性に対する差別を攻撃した。

五番目、福沢と李光洙は、新しい国民像、近代的な韓国人、近代的な日本人を創造し、これをもって近代民族国家を建設するという望みを反儒教の究極的な目標にした。つまり、儒教社会には傍観者はあっても国民がないと考えてよい。両者は近代の国民の創造、その前提条件として独立した個人というものを主張していた。もし独立した個人というものがなければ、近代国民国家を建設するという目標の達成は不可能である。福沢の批判は近代的な国民の出現を妨げる儒教の不平等というものに集中したが、李光洙の批判は、国民を家族の檻、つまり封建的な家族制度の中に閉じ込めてしまう儒教的な「孝」に集中していた。

六番目、二人ともミドルクラス、中流の階級、つまり学者の役割を強調しました。福沢は学者らが官途に就くのを望ましく思わなかったが、社会的な役割に対しては、これを高く評価していました。つまり、これは儒教的な影響から脱皮しなかった、逃れ得なかった証拠であると言っています。

七番目、福沢と李光洙はキリスト教を批判します。

以上、二人の共通する要素に対して整理してみました。

論者は、福沢と李光洙の個人的な背景に対しても触れています。一人は下級侍、もう一人は両班の家庭の生まれ。それから申しますと、二人とも儒教の社会的な矛盾などを観察し得る位置におりながら、儒教の伝統的な価値に、あまり激しく縛られていない身分であったと言えます。二人の生涯が、各々彼らの国の歴史における転換期にあったという点も指摘しています。李光洙と福沢の反儒教思想とは、つまり民族主義の目標の達成という課題に答えることになってしまいました。両国において自由主義、個人主義を論じるとき、儒教克服というプロセスは依然として続けなければならないということです。

以上、反儒教論の政治思想的な意味に対して、韓国の小説家李光洙と福沢諭吉に対する韓教宣（ハン・ギョソン）の論文の検討を終わらせていただきます。

## 六

最後の論文は「福沢諭吉の対外観」です。<sup>(7)</sup>

論者は十九世紀中盤、欧米諸国が東アジアに進出してきたとき、東アジアの三国の反応が各々違ったと考えています。この論文はこうした反応の相違を念頭に置きながら、日本側がどういう反応を見せたのかという点に関心を持って、国家のレベルではなく、知識人個人レベルに焦点を絞って、考えています。もちろん議論の対象は福沢諭吉です。この論文は福沢の対外認識、つまり国際秩序に対する認識、言い換えれば国際政治観を扱っています。論者はここで福沢の国際政治観に関して綿密な検討をおこない、そこに彼の一貫した思维構造、

思考方式の様子、形というものを垣間見ることができると言っています。論者は福沢の対外観を貫いているのは、近代文明主義に根拠をおく近代的な思维構造であり、彼の対外的な目標とっているのは近代国家の形成にあったと述べています。

また続いて次のように言っています。福沢は、西洋体験と共に儒教を批判し、国際秩序を維持する手段として国際法、国際道理を説いて、万国公法の理解、及びこれの受容を主張した。しかしながら福沢はまず欧米の国際法における自然法的な側面に関心を見せます。彼は欧米の国際秩序の中に積極的に入り込んで、同時にその強力な権力を持つ政治的な側面までも導入しようとした。もう一度申しますと、欧米諸国のもっている強力な国家権力、そして強力な軍事力に憧れないではいられなかったのであります。しかし彼が西洋を体験し、西洋の文明を導入、啓蒙していたときの日本は、まだ攘夷論が優勢である。福沢は外国から小国日本の独立を守るために、且つ無謀な攘夷論者を啓蒙するために、自然法的な国際秩序観に立脚した強力な国家権力というものを期待していた。『概略』以後、福沢の言説に自然法に関する言葉がほとんど影を潜めるようになったのは、他でもなく欧米の国際秩序の中で万国公法というものを楯にして、欧米諸国と争えるという自信を持つようになったためである。福沢が国家対国家間の平等の観念を初期に主張したのは事実である。しかしながら当時国家と国家との間には上と下があり、これを決定付ける要素は文明、あるいは力であるという事実もありました。福沢は実定法というものと、自然法というものを認識していたため、彼を称して自然法論者、または自然法思想を持つ人物と言うことができるかもしれないと言っています。

論者は、『西洋事情』外編の各国交際に関しては、チェンバースのポリティカルエコノミーの一部を訳述したもので、自然法というものを特に強調したという伊藤正雄の研究内容を引用しています。

また論者は、自らこの論文の論旨が福沢の思想における対外的な側面と、その展開に焦点を絞ったために、彼の思想の国内的な分野に関する説明を疎かにした感があると告白しています。

もう少し具体的に申しますと、よくよそから聞かれている現実状況の認識の方法、思维構造の多面性等々に対しては、あまり批判的な分析をしていなかったという話です。且つ論者は、福沢こそ、彼なりの近代的思维という思考方法を導入しようと努力した近代人であると言ってもいい、という丸山真男の言葉をかりて、福沢の哲学には価値判断の相対性という柔軟性と主体的独立という原則性が首尾一貫すると言っています。

結論部において、論者は、福沢は近代人であった、しかし同時に前近代、且つ後進近代の要素も懐いていた。したがって西洋の文明を相対化しながらも状況的にこれを絶対化し、外と内とを区別しながらも状況を見て、内のためにはいつでも外を侵害しても構わないという論理に陥ったことも事実だと言っています。福沢諭吉が悲願とした主権的国民国家の形成という課題が、今日、その含む意味において限界と評価されたり、批判されたりするのは正当でないかもしれない。しかし福沢の対外観の限界、または限界性が現在を生きている日本人にまでも息づいていると言うならば、福沢の長所だけを採り出すよりは、その限界のことに關しても改めて考えていくこともまた有意義なことであろうと見ています。

以上のように六篇の論文を通して、今、韓国の研究者たちの福沢諭吉に対する研究と論文を紹介したことで今日の課題を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。(拍手)<sup>(8)</sup> (丁)

註

- (1) 本稿は、二〇〇四年十月二十九日に、慶應義塾福沢研究センター講演会として、三田演説館において行つた報告の

原稿に、速記録をも参照しつつ若干の改定を加え、さらに、二〇〇七年十一月二日に行った同センター秋学期シンポジウムの内容から、その後の報告を註として付したものである。

(2) 兪吉濬と福沢諭吉の政治論比較研究——韓日近代化の方向の差異を中心にして——

李起勇 (イー・キョン) 善文大学教授・日本学

I. はしがき

II. 兪吉濬の政治論

III. 福沢諭吉の政治論

IV. 兪吉濬と福沢諭吉の政治論比較

V. 結論

発表機関・韓日関係史学会「韓日関係史研究(第三輯)」(二〇〇〇年十月)

(3) 福沢諭吉の政治思想——彼の自由の概念を中心にして——

韓教宣 (ハン・ギョソン) 慶熙大学校教授・政治学

I.

II. (I) 本人の自由と国家の自由の連繋

(II) 自由の異なる有用性

(III) 自然権としての自由

(IV) 平等な自由を保護する政府の役割

(V) 本性としての自由

(VI) 自律としての自由

(VII) 市民権としての自由

- (4) 発表機関…韓国政治学会 一九九七年十二月年例学術大会  
福沢諭吉と朝鮮開化派——彼の対朝鮮観と開化派への援助を中心に——（一八八五年初まで）

金旼奎（キム・ミンギユ）

I. はしがき

II. 福沢の対朝鮮観

1. 開化派との出会い以前
2. 開化派との出会い以後

III. 福沢の対朝鮮 開化派への援助

1. 経済的な援助
2. 文化的な援助
3. 政治的な援助

IV. 福沢の脱亜論

V. むすび

発表機関…一九八七年 日本 筑波大学大学院修士学位論文

- (5) 福沢諭吉の朝鮮観研究（1）

崔徳壽（チェ・ドクス） 公州師大歴史教育科教授

I. 序論

II. 本論

1. 壬午軍乱の前後の時期
2. 甲申政変～甲午更張以前

### Ⅲ・結論

発表機関…一九八三年「民族文化研究」高麗大学校

(6) 福沢諭吉と李光洙(イ・クァンス)の反儒教論の政治思想的意味

韓教宣(ハン・ギョソン) 慶熙大学校

目次なし

発表機関…韓国政治学会四月 月例発表会 一九九七年四月

(7) 福沢諭吉の対外観

金鳳珍(キム・ボンジン) 北九州市立大学教授

1. はしがき

2. 対外的形成の前史

I. 江戸時代の対外観

1. 多元的な世界観の実相と展開

2. 日本型の華夷意識

II. 幕末の対外政策と知識人の対外観

1. 幕末対外政策の転回

2. 幕末知識人の対外観

3. 国際秩序観

I. 国際秩序観の位相

II. 国際秩序観の構造

1. 国際秩序観の特徴

- 2. 国際秩序の中での日本の位置
- Ⅲ・国際秩序観と自然法思想
- 4. 現実の国際政治観
- I・国体論
  - 1. 武士精神
  - 2. 天皇論
- Ⅱ・国権論
  - 1. 国権と民権との関係
  - 2. 国権論への傾斜
- Ⅲ・アジア進出論
  - 1. アジア観
  - 2. 脱亜論と現実国際政治観
    - 1) 脱亜論以前
    - 2) 脱亜論の再評価とその位相
    - 3) 脱亜論以後
  - 5. むすび

発表機関・韓国社会史学会 「社会と歴史第三三卷」一九九一年十一月

(8)

最近の韓国の福沢諭吉論を紹介いたしますと、『金玉均と福沢諭吉の文明開化の思想―思想的な特徴と朝鮮の開化に関する問題の比較を中心に』。これは二〇〇三年に発表されたものです。もう一つは『福沢諭吉の文明開化的教育論の一考察』これは知育批判を中心にして、二〇〇〇年に発表されました。さらに、一九九八年に発表したものを、

二〇〇七年に再度発表したようですが、題目は『福沢諭吉の学問論に対する一考察』となっております。

〔付記〕 研究者への敬称は、本稿においてはすべて省略した。